追　悼

# 雪に魅せられたシティーボーイ，宮崎伸夫さんを悼む

中尾正義，竹内由香里

北信越支部の十日町におられた宮崎伸夫さんが2018 年 9 月に亡くなられたとの報に接してとても驚きました．まだ 63 歳という若さでした．およそ 1 年前に十日町で開かれた雪氷研究大会2017 でお元気な姿に接し，旨いお酒を売っている十日町の酒屋さんをいつものように紹介して頂いたりしていたばかりです．宮崎さんはわたし中尾よりも 10 歳ほど若く，先に彼岸に行かれるとは思いもかけないことでした．

宮崎さんと初めてお会いしたのは 1988 年のことです．わたしが北海道大学から長岡雪氷防災実験研究所に赴任した翌年のことでした．森林総合研究所の十日町試験地におられた遠藤八十一さんに，「十日町から少し山を登った西方という集落に民家を借りて住み始めた大都会しか知らない青年だよ」といって紹介されたのがはじめでした．聞けば雪深い田舎での暮らしにあこがれて東京からやってきたとのこと．豪雪で有名な十日町よりもさらに雪深い西方には空家を含めて家が数軒しかなく，「人が住んでいない家なら住んでもいいよ」と言われて，移り住むことを決意したとのことでした．その後，十日町在住の女性と知り合って結婚され，一女一男のお子さんにも恵まれました．

宮崎さんは 1980 年に立正大学の地理学科を卒業され，長く雪氷学会の事務局長だった石原健二さんが起こされた（株)自然環境科学研究所に入社されました．同研究所は当時としては珍しい雪関連調査を得意とするコンサルタント会社でした．その頃から雪氷学を学んだ多くの学生や院生を社員として受け入れおり，民間ベースの雪氷研究者が次々に育っていました．その後設立された雪氷関連のコンサルタント会社創始者の多くは，同研究所の出身者です．宮崎さんも，同研究所での勤務経験の影響で西方への移住となったのでしょう．西方へ来られるとほぼ同時にクライメットエンジニアリングというコンサルタント会社を創設され，その後，雪氷学会の法人会員の一つとしても学会の発展に貢献してこられました．

**写真 1**　受賞の挨拶をする宮崎さん（2008 年 5 月，長岡市にて．遠藤八十一氏撮影）．

当時は，日本政府の研究関連予算の大部分は国立大学を所掌する当時の文部省と，文部省以外の省庁の研究予算を握る科学技術庁とが国の研究予算の獲得で争っていた時代でした．とりわけ 1980 年代の終りから 1990 年代の初めにかけての頃は，研究活動においても地球環境問題への取り組みに注目が集まる時代でした．このため，この分野ではほとんど実績の無かった科学技術庁も地球環境問題に関わる研究支援のための予算要求を始めたのです．従来から支援実績のあった老舗の文部省との間に新たな予算獲得競争が始まったともいえる状況でした．

このため，大学の研究者が科学技術庁から研究予算を貰うと文部省からの予算が減らされるという噂がありました．わたしが長岡で勤めた防災科学技術研究所・長岡雪氷防災実験研究所は科学技

術庁傘下の研究所です．研究予算はすべて科学技術庁からきていました．したがって，その予算を使って大学の研究者と共同研究を行うというのは極めて困難な時代でした．例外的に協力していただいた大学の先生も「（噂が本当だとすれば）これで来年から文部省予算である科研費（科学研究費補助金）があたらなくなるなあ」などと言っていたものです．

科学技術庁からの予算で行う研究活動に大学の皆さんの協力が得難いそんな時代に，協力して観測研究を行ってくれたのがいわゆる民間の研究者の方々でした．わが国の山地に眠る膨大な水資源である積雪に対する地球温暖化の影響をモニターしようという長岡雪氷防災実験研究所のプロジェクトでは，宮崎さんの大きな協力をいただきました．山地の降雪，積雪や気象の観測装置の設置やその維持，観測データ回収などの仕事です．この計画は最低でも 30 年は続ける必要があるということで始めたものです．このプロジェクトはわたしが長岡から名古屋大学に転出した後も，長岡雪氷防災実験研究所の清水増治郎さんや山口悟さんのおかげで様々な形で継続されましたが，宮崎さんには当初からずっと関わって頂き，まもなく気候値に対応する 30 年間のデータが得られるところまできています．

このような国内観測に限らず，宮崎さんにはインドやネパールとの国際共同観測でも協力していただいたものです．ある年に，インドの研究所との共同研究立ち上げの打ち合わせを終えたわたしは，観測測器を持って入国する宮崎さんとデリーのホテルで待ち合わせたことがありました．

宮崎さんが日本を発ってインドに着くその日です．夕刻の到着予定時刻に合わせて空港まで迎えに行ったのですが，待てど暮らせど宮崎さんが出てきません．空港で確認したところ，宮崎さんが乗って来たはずの便はとっくに到着しており，乗客は全員降りたとのこと．もう日付が変るという時刻になっていました．念のためにそれから 1 時間ほど待ったのですが，真夜中とあって入国してくる人も途絶え，人の動きが全く無くなってしまいました．ひょっとしたら急病か何かで来られなくなったのかもしれないと思い，明朝，ホテルから国際電話をかけて確認するしかないなあと思いながらホテルへ戻ったのでした．

ところが，翌朝わたしが起きるか起きないかのうちに，なんと宮崎さんがホテルのわたしの部屋までやってきたのです．聞けば，通関時に観測測器をインドに持ち込む理由を微に入り細に入り聞かれ，問題の測器は保税倉庫に運ばれてしまって，なかなか通関してくれなかったとのこと．真夜中過ぎの午前 2 時近くまで，なんだかんだ言っては通関の許可を出さず，とはいえ，税関の係官ははっきりだめというわけでもなく，時間だけを引き延ばしていたようだったとのことでした．

直感的に，当時インドで横行していた係官による袖の下の要求ではなかったのかと思いました．1 米ドル札を数枚でも握らせればよかったのではないかと思いましたが，まじめな宮崎さんには思いもよらなかったことのようでした．結局は宮崎さんの粘り勝ちで，いわゆる賄賂を 1 銭も払うことなく測器は通関できたそうですが，入国したのは夜中を過ぎて明け方になってしまっていたとのことでした．

通関時のトラブルに加えて，入国後ほとんど人のいない空港でやっと見つけて乗ったタクシーは，どう頼んでもわたしと待ち合わせていたホテルに行ってくれず，「そんなホテルよりもはるかに素晴らしい良いホテルがある」と言って，全く別のホテルに連れていかれたとのこと．そこからわたしのホテルに電話をかけたいと言ってもかけさせてもらえず，タクシー代としての 100 米ドルに加えて，わずか数時間しか滞在していないそのホテルでもホテル代としてさらに 100 米ドルを取られたとのことでした．空港で乗ったタクシーとホテルとがグルだったようだとその時になって気付いたそうです．明るくなってすぐにそのホテルを出て，通りかかった別のタクシーでわたしのホテルにやっとたどり着いたという話でした．

わたしの顔を見てほっとされたのでしょう．この武勇談を語りながら，宮崎さんは日本出国時に免税で買った 720 ミリリットル入のウイスキーの瓶を半分以上も飲み干して完全に酔っ払ってしまいました．生まれて初めてのインドで，本当に心細い思いをされたのでしょう．わたしがあと 2〜3 時間も空港で待っていれば，宮崎さんがこんなに大変な目に合わなくて済んだのに，と考える

と本当に申し訳のないことをしたものでした．とはいえ，人を疑うことを知らない，真にまじめな宮崎さんの人柄をしのばせるエピソードのような気もします．

都合 5 年半勤めた長岡雪氷防災実験研究所からわたしは 1993 年に名古屋大学に転出しました．名古屋は一冬に数回は雪が降りますが積雪観測を行えるほどの積雪にはまずお目にかかれません．このため，積雪観測を伴うテーマを研究したいという大学院生が入学してきたときには，雪には事欠かない宮崎さんのご自宅付近で積雪観測を何度もさせていただきました．中国からやってきた留学生の修士論文や融解課程での水の同位体分別に関わる博士論文は，その積雪観測のおかげで生まれたものです．

わたしが名古屋大学から京都の総合地球環境研究所に転出した 2001 年以降は，野外調査等でご一緒する機会はなくなりました．しかし，大学の研究者からいわばそっぽを向かれていた長岡時代の野外調査や，名古屋大学の大学院生の修士論文や博士論文への温かいご支援にはお礼の言葉もありません．雪に魅せられたシティーボーイのご冥福を心よりお祈りいたします．

（中尾正義）

21 世紀に入ってからの宮崎さんについての執筆を中尾正義さんから託されました．私はここに書き切れないほど宮崎さんにお世話になりました．特に新潟県の妙高山に近い幕ノ沢で継続してきた雪崩や気象の観測には，当初から長年にわたって多大なご協力をいただきました．妙高山の周辺は新潟県の中でも特に雪の多い地域のひとつです．そのような気象条件の厳しい場所で半年に及ぶ長い積雪期間を通して順調にデータが得られているのは，雪の扱いに慣れ，豪雪地での観測のノウハウを体得された宮崎さんの創意工夫のおかげと思っています．そんな宮崎さんは，初めてお会いしたときから私から見ると「雪国の人」でしたから，（余計なことですが）中尾さんがつけられた本稿のタイトルは，実は私には違和感があります．もう宮崎さんにそんなことを言って笑い合えないと思うと残念でなりません．

宮崎さんは 1988 年に雪深い新潟県の中里村（現十日町市）西方で有限会社クライメットエンジニアリングを創設し，密度サンプラーや神室型スノーサンプラー，測深棒など，積雪の調査に欠かせない各種の観測用具を製作，販売されていました．これらの用具が積雪調査の必需品であるにもかかわらず，一般には入手し難い状況であったことを憂えた宮崎さんは，見よう見まねで図面を板金屋に持ち込んで協力を仰ぎ，1994 年に 100 $cm^3$ の角型密度サンプラーを完成させました．材質，金属板の厚み，カッター形状の違いにこだわり，使い勝手の良いサンプラーを追求した製品でした．

**写真 2**　神室型スノーサンプラーで積雪水量を測定する宮崎さん（2008 年 4 月，妙高・幕ノ沢にて．上：Evgeniy Podolskiy 氏撮影，下：河島克久氏撮影）．

また，効率良く手軽にスノーサーベイをしたいという一念で，1953 年に大沼匡之先生が開発された神室型スノーサンプラー（53 型）を基にスノーサンプラーの製作にも取り組まれました．大沼先

生の助言に忠実に，その上で独自に材質構成や形状を試行錯誤しながら改良を重ねて 2000 年に完成した神室型スノーサンプラー（'00 型）は，押込み抵抗，直進性，直刃の切れ味に優れ，軽量かつ強度が高く，作業効率が良いという完成度の高いものでした．宮崎さんが大沼先生から教わったとおり底面に「葉っぱ 1 枚」だけついてくるサンプリングが可能です．

このように開発の発端や経緯を文献で丹念に調べ，現場のニーズを精力的に収集して宮崎さんが製作された調査用具は，従来品に比べて様々な改良が図られていて，使い勝手の良さや耐久性に定評がありました．宮崎さんの「降積雪調査用具の高度化と普及に関する貢献」は，雪氷研究者や技術者の活動を根底から支え続けていると評価され，2008 年に日本雪氷学会北信越支部の雪氷技術賞を受賞されました（写真 1）．

宮崎さんはまた，2001～2010 年度には本学会北信越支部幹事，2011 年度からは同支部理事として支部活動に貢献されました．2011～2013 年度には本学会理事も務められました．2011 年に長岡市，2015 年に松本市，2017 年に十日町市で開催された雪氷研究大会では，実行委員として大会の運営に尽力されました．同時にクライメットエンジニアリングとして本学会の多くの全国大会で技術展示に出展し，長年にわたって大会の講演予稿集や講演要旨集に広告を掲載し続け，その上協賛までして下さることもあり，いつも精一杯大会を支援して下さっていました．

2018 年 3 月に国際雪氷学会（IGS）主催の国際シンポジウムが京都市で開催され，本学会が共催して運営に協力しました．そのシンポジウムのバンケットには，入院されていたにもかかわらず，宮崎さんが贈って下さった新潟県の日本酒がありました．4 月になり雪が消えた頃のある日，宮崎さんが突然，私の職場（森林総合研究所十日町試験地）に顔を出して下さいました．病院から一時帰宅が許されたとのことで，心配そうな顔をしていたに違いない私たちに病状や今後の見通しを，

**写真 3**　雪崩堆積物の調査をする宮崎さん（2008 年 4 月，妙高・幕ノ沢にて）．

あたかも業務の報告をされているような調子で説明して下さいました．「また来て下さいね」と大きめの声で言って，そう祈る気持ちで見送りましたが，雪氷研究大会（2018・札幌）直前の 9 月初め，訃報を受け取ることになりました．届いたばかりの雪氷研究大会の要旨集には，いつもの通りクライメットエンジニアリングの広告が掲載されていて，「生涯現役」と大きく書かれていました．宮崎さんは闘病中も仕事を止めようとはされず，まさに現役を貫かれた生涯でした．宮崎さんへの深い感謝と哀悼の意を表しますとともに，ご冥福を心よりお祈りいたします．

（竹内由香里）

（2019 年 2 月 4 日受付）